

第I部 総論 終章 南アジアと日本

著者	佐藤 宏
権利	Copyrights 日本貿易振興機構（ジェトロ）アジア 経済研究所 / Institute of Developing Economies, Japan External Trade Organization (IDE-JETRO) http://www.ide.go.jp
シリーズタイトル	地域研究シリーズ
シリーズ番号	8
雑誌名	南アジア--政治・社会
ページ	47-50
発行年	1991
出版者	アジア経済研究所
URL	http://hdl.handle.net/2344/00015557

終章

南アジアと日本

第7巻の経済編，第8巻の政治・社会編と，アジア経済研究所の過去30年の研究を中心にレビューした。研究者にはそれぞれの研究の動機があり，発表された作品には，字づらに書かれた以上の意図がこめられていた場合も多いに違いない。この種の作業をして，いつも気が重いのは，文意を正確にとれたかということとはもとより，筆者の意図に気付かぬまま通りすぎてしまったのではないかという不安に苛まれることである。

ともあれ編者の能力にあまる分野についてまで手を広げてきた。一応ここに論を閉じるにあたって，私たちが戦前戦後を通じて，日本も含む同時代の世界のなかに南アジアをどのように位置づけようとしてきたのかを考えることによって結びにかえようと思う。地域研究とは，ひとまずは他者と措定したものを，研究という作業をつうじて知ることによって，実は己を再認識することだという単純な真理からして，このような店仕舞のしかたも許されるだろう。

第1章でみたように，確かに日本の戦前のインド理解は中国や朝鮮との関わりから発するというマージナルな様相をとまっていた。再度山折 [140] を引用すれば，アジア認識においてインドは「食客」的地位にとどまった。インドを知ることによってアジアとの関わりや居ずまいをただすというような種類の関係ではなかった。したがってインドの民族運動に対する日本側の認識も，長崎 [87]，中村尚司 [91] その他の研究があとづけているように，決して深いものではなかった。むしろわずかな理解者を例外として多くの場合敵対的でした。双方の互いに対する期待と評価には奇妙なズレがつ

きまとった。「日本とインド」という主題では日本側のインド認識が狙上に載せられることが多いが(大形[21],[22]),石井一郎[7]が示しているように、戦前におけるインド民族主義側の日本認識にも日本に対する「おおきな隔絶感」が存在した。

しかしインド側の日本観をさらに問題にするならば、それが東南アジアや中国におけるような徹底した批判性を維持して今日にまで至るというような性格のもではなかったことも事実である。最近の事例をひくならば、昭和天皇の死去に際してのインド政府の反応を中国、東南アジア諸国の政府・ジャーナリズムの態度と比較してみるのがよいだろう。死去がラジーブ・ガンディー政権下の日印経済関係の久方ぶりの改善と時期的に一致したことからだけでは、この反応は説明できない。日本軍国主義への批判や中国侵略に対するインドの人々の厳しい反応を和らげたものが何なのか、第二次大戦期とその直後の両国の関係については長崎編[89]などの多くの労作があるが、編者としてはこのような視点から戦前戦中の日印関係に関心を抱いている。

戦後のインド認識についてもさほど事情は変わらない。

いささかの期間ではあるが、1960年代半ばまでの世界で、第三世界あるいは非同盟ということばの輝きを代表していた国の一つは、明らかにインドだった。また南アジアということば自体もインドと等置されていた。しかし、その後世界を理解する枠組みは次第に「南北」という軸に傾斜しはじめ、南アジア地域は「南」のなかの最も「南」的な地域、つまり貧困地域という認識のなかに位置づけられるようになった。その裏には日本が「北」の国として成長してゆく過程があった。そして日本にとっての「アジア」から南アジアの地域はすっぽりと落ちていた。この1960年代半ば以降の日本と南アジアの対照的な歩みが、おおかたの日本人のインド観、南アジア観をかたちづけてきた背景である。第二次大戦以降も、日本にとって南アジアは周辺的な意味しかなく、かつ中国や東南アジアのように、反省の刃をつきつけられることもない相手であったから、このような「成長比較」をこだわりなく表現できるという面もあった。

いまや南アジアはアジア・太平洋という「繁栄の枠組み」外の、貧困に満ち満ちた不可解な世界という位置づけすら与えられようとしている。私たち研究者は、半分同情、半分非難をこめて「インドは解かりづらい国ですね」などとよく話しかけられる。よく考えてみると「貧困」図式で十分なら誰もこのような感想を述べないだろう。端的に言って「貧困」だけでは測れない何物かのあること、そして研究者がそれをきちんと表現しきれていないことを、この感想は問わず語りに教えてくれているのである。南アジア地域は「繁栄の枠組み」の外の世界を知るための知的枠組みを提供してくれる地域の一つであるに違いないのである。

それでは第7巻、第8巻のサーベイがそうした知的枠組みを分かりやすい姿で示したのかと問われれば、编者としては大いにたじろぐところがある。しかし少なくともそのための素材は個別の研究が随所で提供していると思う。たとえば、世界人口の5分の1を擁する南アジアは、すでにそれで一つの世界である。とくにインドは、「貧困」図式に収めきれない「大国」的要素を内包する国である。南アジアでの突出した軍勢力と発達した官僚制、錯綜した民族問題などを理解できるのは、私たち日本人よりは、中国人かロシア人かもしれない。政治・社会研究はこのようなインド理解の手掛かりをすでに与えている。また経済研究はこうした「大国規模」の経済が開放へ向かう場合のいくつかの困難について、十分に意識している。

日本に住む私たちはこれから先も、国の内外での発展途上国の人々との共存を優先的に考えていかなければならないだろう。インドをはじめとする南アジア世界は日本が戦後築いてきたアメリカ、東南アジア中心の世界との付き合い方とは異なった、ある意味ではもっと幅の広い関わりを他の地域との間にもっている。それは移民、植民地支配、非同盟、イスラム連帯などの、さまざまなチャンネルを通じて歴史的に作り上げられてきたものである。にわかには「国際化」などと慌てる私たちに比べれば、南アジア世界自身は、はるかな過去からインターナショナルであったのである。

